

第196回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第5回通信句会) 開催

3月23日の午前10時から、2回目の有志によるPC会議を実施し、3月「通信句会」で発生した問題点や、4月「通信句会」に改善すべきことなどを討議しました。難題の「兼題の提示」については、交替当番制という提起もありましたが、経験値の活きるお仕事であり、引き続き原晶如さんをお願いしました。晶如さん、よろしくお願い致します。次に選句の段階で「何方が投票して下さったかを知りたい」というご要望が提起され、これは句会参加者には貴重な情報なので、検討することになりました。

実は、本案件ご担当の奥田和感さんが、4月はご転居というスケジュールがあり、4月は晶如さんが「句会結果のまとめ」の役割を、担当して下さる関係もありまして、早くもこの改善にトライして下さいました。如何でしょうか。句会ご参加の皆さまには、貴重な情報になったのではないのでしょうか。晶如さん有難うございました。

さて、4月の通信句会に参加して下さいしたのは、次の方々です。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然の15名です。

4月2日に、晶如さんから兼題の提示があり、今月の句会はプレーボール。7日には投句の締切り、9日には、投句一覧表が告知され、12日までに選句も済み、15日には選句結果のまとめが、晶如さんから報告されました。前述しましたように和感さんが転居というスケジュールを持たれていましたので、今月は全て晶如さんをお願い致しました。

4月の兼題毎に選句された優秀句は、下述の通りです。改めましてご鑑賞下さいますようお願い致します。

兼題1. 「雲雀」「揚雲雀」etc

◎『少年の 大の字に寝て揚雲雀』	荻女	天1 ☆8
◎『草に寝てすべて放念揚雲雀』	多佳	天1
◎『揚雲雀きらきらと声こぼしけり』	明峰	天1

兼題2. 「菜の花」「花菜雨」etc

◎『島の黄を海へ溶かさむ花菜雨』	白然	天2
◎『菜の花の土手は光の帯となり』	明峰	天1 ☆9
◎『菜の花や母娘で唱歌口遊び』	傘吉	天1
◎『菜の花を表紙で贈る社内報』	創風	天1
◎『鮮やかな菜花のひたし朝の膳』	歌多音	天1

当季雑詠の自由題 (=晩春=)

◎『春風や雲は異国へ旅にでる』	多佳	天2
◎『花屑を旅の衣に折りたたみ』	栄女	天1 ☆8
◎『自粛して鉢の花見を楽しめり』	創風	天1
◎『かつかつと春の蹄よハイヒール』	荻女	天1
◎『笑む母に写さる娘や桃の花』	白然	天1
◎『墨を磨る音の静かや花曇』	晶如	☆8

兼題1. 「雲雀」の部では、荻女さんの句「少年の大の字に寝て揚雲雀」が、天賞一つと最多得票賞(☆印)を獲得しました。次点の多佳さんの句「草に寝てすべて放念揚雲雀」と同じ草叢に寝る句でしたが、評価を分けました。荻女さんの句は「少年が大の字に寝て見ている青空と雲雀の景の中に、少年の未来への飛躍を感じさせるものがある」との天賞評に対しまして、多佳さんの句は「草に寝て見る青空と草叢から、次々と空へ飛び出して

いく雲雀の景に、楽しかった青春時代を懐かしく思い出す」という天賞評を得ました。未来を見つめる純真な少年像と、すべてを放念してしまう青春像というところでしょうか。多佳さんの句の中七「すべて放念」には、兼好法師の徒然草的香りを見ました。

次に明峰さんの句「揚雲雀きらきらと声こぼしけり」が、天賞一つを獲得しました。この句への天賞評は、中七の「きらきらと声」というオノマトペの共感、つまり「音の可視化」への共感を持たれたようです。雲雀の鳴き声を通して「生きる」という充実感を持たれたのかも知れません。

兼題2. 「菜の花」の部では、白然の句「島の黄を海へ溶かさむ花菜雨」が、天賞二つをいただきました。選者のお言葉には「島一面の菜の花に降る雨の風情」を採り上げて下さいました。実は淡路島の菜の花が、雨にむせぶ景を思い返していました。次に明峰さんの句「菜の花の土手は光の帯となり」が、天賞一つと最多得票賞(☆印)を獲得しました。この句は中七から下五にかけての「土手は光の帯となり」に、菜の花の姿が語られており、選者に強く「光の帯」の楽しい春のリズムの印象を与えました。

次に傘吉さんの句「菜の花や母娘で唱歌口遊び」が、天賞一つを獲得しました。口遊ぶ唱歌は「菜の花畑に入日薄れ・・・」でしょうか。母と娘のハミングが、野原をリズムカルに流れます。何だか雲雀の鳴き声まで聞こえて来るようです。次に創風さんの句「菜の花を表紙に贈る社内報」も、天賞一つを獲得しました。天賞の選者は、社内報の表紙に「菜の花」を配した編集者の心優しさに、共感されたのでしょうか。もう一句、歌多音さんの句「鮮やかな菜花のひたし朝の膳」も、天賞一つを獲得しました。春の料理必須の「菜の花のおひたし」です。すっきりした苦みが、今にも口の中に広がって来るようです。選外になりましたが、晶如さんの句「菜の花や雨の安曇野道祖神」も、旅の一コマを見事にキャッチした優秀句ではないでしょうか。高得票を獲得しました。

当季雑詠の自由題の部では、多佳さんの句「春風や雲は異国へ旅にでる」が、天賞二つを獲得しました。長引くコロナ禍に束縛される不自由さに対して、自由に長閑に動く雲の様子を中七、下五で「雲は異国に旅にでる」と表現されました。天賞への選者は、雲の流れに自身の気持ちを託したか、あるいは羨ましく思われたのだと思います。

次に栄女さんの句「花屑を旅の衣に折りたたみ」が、天賞一つと最多得票賞(☆印)を獲得しました。旅の衣の中に仕舞い込まれた花屑は、それが何だったのだろうか、読者の心を惹きつけました。作者は旅慣れた方と推測されますが、読者に強烈なインパクトを与えました。次に、創風さんの句「自粛して鉢の花見を楽しめり」が、天賞一つを獲得しました。「鉢の花見」とは、譬えささやかでありましても、とても豊かな気持ちにさせてくれます。多くの選者の共感をいただきました。

荻女さんの句「かつかつと春の蹄よハイヒール」も、天賞一つを獲得しました。選者のお言葉「使われたかつかつというオノマトペに、若々しさや生き活きとした春ならではの勢いを感じる」に、すべてが語られていると思います。もう一句、白然の句「笑む母に写さる娘や桃の花」も、天賞一つをいただきました。素朴な母娘の堅固な親子関係を、季語の「桃の花」に託しました。

天賞はありませんが、晶如さんの句「墨を磨る音の静かや花曇」が、最多得票賞(☆印)を獲得しました。上五の「墨を磨る」という静かな部屋の雰囲気と。季語「花曇」の醸し出す情感が、多くの得票に繋がったのだと思います。粹な句になりました。

住田先生ご退任のあとの二回目の句会になりました。有志によるオンライン会議も重ねましたし、段々と参加者の息が通じ合う句会になってきたと思われます。200回を記念する句集の出版を目指して、より良い通信句会を継続することを心がけます。引き続きよろしく願い致します。次回は五月です。季語も「夏」に入ります。ますます健康に留意して、俳句を楽しみましょう。

白然(記)